

(一社) 日本色彩学会東海支部 2018 年度講演会報告

「肌色と化粧の色模様」 講師：棟方 明博 先生

(元資生堂株式会社、コスメティクスと肌・顔研究会主査)

日時：2018 年 12 月 22 日 (土) 14:30~16:30

場所：ウインクあいち 1205 会議室

司会・進行：下川美知瑠

参加者数：36 名

今回の講演会では、肌色のデータベース構築や肌計測による化粧効果の評価など、肌色に関する幅広い研究を長きにわたり続けられている棟方明博先生をお招きしました。これまでの研究データを数多く紹介していただきながら、貴重なお話を伺うことができました。

はじめに、約 100 年前の先住民の赤化粧に始まり、そこから日本独自の白化粧へと移り変わっていく化粧の歴史的な背景をご説明いただきました。白化粧の特徴が塗りつぶす点にあり、「隠す」意識の表れであるといったお話に納得すると同時に、その時代の七色粉白粉といわれる今で言うコントロールカラーやチークのような存在があったというお話には大変驚きました。

続いて、「肌色」の測色について、その難しさについて解説いただきました。棟方先生は、それまで判定者の感覚で行われていた色の管理を、色差計などの機器を用いて行うという大きなミッションを経験されており、その過程で多くのご苦労や工夫をされたとのことでした。その一例として、対象としている「肌」は、色票や工業製品などと違って色ムラがあること、温度で変化すること、半透明であることなど、いくつものハードルがあり、前提として測色に不向きなものであるということが紹介されました。聞いてみれば確かに！と思う内容なのですが、自分自身が普段対象としているものは布地や色票であるため、肌色の測色がこんなにも多くの難しさを抱えていることをあらためて認識しました。

また、1991 年から 2001 年の 10 年間の肌色変化について、多くのデータとともに詳しくご紹介いただきました。10 年のうちに、肌色は白くなっているのでは？という疑問の実証のため、年間 1000 名程度の顔色のデータを収集されたそうです。(ここでは、寒い日に暖房が効いた部屋に入った場合、肌がほてるなど不安定な状態になってしまうため、部屋の温度に順応するためには 2 時間ほどかかることもある....という裏話も紹介されました。)

また、測定径を大きくすれば色ムラを平均化することができるが、大きくなればなるほど肌が変形して測定誤差が生まれるため、測定径を微妙に調整した特注品を使用していたということをお聞きました。そのようなたくさんの工夫と苦労を積み重ねて得られたデータをもとに商品が開発されているということを知り、大変驚きました。

次に、肌色の嗜好・感受性というキーワードで、メラニンやヘモグロビンの関係性について伺いました。その中で印象的であったのは、ヘモグロビンの増加はメラニンの増加につ

ながるため、反射が減少するにもかかわらず、官能評価では白さや明るさが向上していると評価されたというお話です。化粧という行為は自分自身のモチベーションを高めるという側面も持っていますが、第三者からの評価に対するものが大部分を占めています。自分の肌をどんな色にしたいのかではなく、どんな肌色に見せたいのか、さらにどんな印象を与えたいのかということが重要な目的であるので、官能評価の結果は大変興味深いものです。ここでも、肌色を対象とした調査の難しさがあり、測色したデータはあくまでも「肌色」であり、そこから「顔色」というステージに昇華しなければならないという言葉が印象的でした。

先生は最後のスライドで、「色に翻弄されて50年、肌色に弄ばれて30年」という言葉を示されました。肌色のデータは測色値と官能評価が複雑に絡み合い、さらに嗜好も時代によって変化するものであることから、長年にわたって肌色にかかわってこられた先生の率直な思いが示されていると感じました。

盛りだくさんの内容の講演後には、会場内からの多くの質問にお答えいただき、予定の時間を過ぎてしまうほど活発な議論が行われました。ご講演いただいた棟方先生、ありがとうございました。

(鷺津 かの子)